〈研究論文〉

成人看護学（急性期）のアクティブラーニング型授業の評価

奥　百合子[1)]　・　今井　栄子[1)]　・　松尾　尚美[1)]

【要旨】

成人看護学（急性期/周手術期）の授業でアクティブラーニングの授業形式導入により、学修意欲の向上・学修効果を明らかにすることを目的とした。看護学部 2 年生対象に自記式質問紙調査を行い、83 名を有効回答として分析を行った。①2 年次後期と 3 年次前期の授業自己評価平均および学修意欲・学修方法の自己評価平均は、各授業とも初回時に比べて終了時に高くなる。②事前学修時間と学修能力の自己評価が増加するほど、学修意欲・学修方法の自己評価も高くなる。③学修能力の自己評価の高・中・低群において、授業自己評価および学修意欲・学修方法の自己評価平均は有意な差がみられた。学修意欲向上、学修効果の理由として、アクティブラーニングによる各回の授業を通して学びが蓄積され、授業全体の学修目標に対する理解度も高まったことが示唆された。このことから学力や学修意欲を高めるための授業改善や、学修効果に影響のある要因などを含めて検討していく必要が示唆された。

キーワード：Active Learning（能動的学修）、成人看護学（急性期/周手術期）、学修意欲

Ⅰ．はじめに

社会で活躍する人材を育てるために、主体性を身につける機会を提供することが大学に求められている（経済産業省，2006）。社会が求める重要な態度の一つである主体性は学生が自ら高めていくことが重要である。看護学を基盤とした学修過程において主体性を身につけるには、自立、自律した能動的学修が必須となる。能動的学修は、アクティブラーニングと称されており、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法である。発見学修、問題解決学修、教室内でのグループディスカッション、グループワークも有効なアクティブラーニングの方法とされている（文部科学省，2012）。

城西国際大学看護学部は、地域の期待を担って、2 年前に開設された新設学部である。地域他国内の高校からの推薦入学、AO 入試、一般入試など多様な入試形態で学生が入学する。

[1)] 城西国際大学看護学部看護学科

そのため、学生の学力・意欲は多様である。従来型の受身の授業形態に慣れきった学生に対して、グローバル社会が期待している社会的基礎力、「能動的学修」を身に付け、医療チームのリーダーとなっていける人材教育をめざした取り組みが重要である。多種多様な学力や学修意欲を向上させる授業改善により、看護師をより具体的に志し、正しく豊富な知識を使って考え抜く力を育成することにつながる。成人看護学（急性期/周手術期）において、主に周手術期の患者が対象であり、急激に変化する生体反応を捉えて回復を支援する上で主体的に考え抜く力は必須である。また成人看護学は看護師国家試験の出題範囲においても、他領域に比べ広範囲であり、さまざまな知識を用いて患者の状態を深く思考する力が求められている。

本研究は、成人看護学（急性期/周手術期）においてアクティブラーニングの授業形式導入によりどの程度学生の学修意欲向上、学修効果があるかを明らかにすることを研究目的とする。

Ⅱ．方　法

１．対象者

2 年次後期（2013 年度 9 月～1 月）成人看護方法論（急性期/周手術期）の受講生 119 名、3 年次前期（2014 年度 4 月～7 月）成人看護方法論演習の受講生 115 名を調査対象とした。

２．調査期間

2013 年 9 月～2014 年 7 月

３．成人看護学（急性期/周手術期）のカリキュラムおよびアクティブラーニングの授業形式

（1）成人看護学（急性期/周手術期）のカリキュラム

城西国際大学看護学部における成人看護学（急性期/周手術期）のカリキュラムは、2 年次前期の成人看護学概論、2 年次後期に成人看護方法論にて、人体の構造、疾病治療学、生理学などの知識を基盤に成人患者に対する看護について段階を経て学修できるよう設計されている。3 年次前期の成人看護方法論演習では、2 年次に修得した成人患者に対する看護を、演習などを通し実践的な看護実践力を修得する機会としている。この成人看護方法論演習を修得できると、3 年次後期には実際の病院で行われる成人看護学実習（急性期）を履修する。

2 年次後期（2013 年度 9 月～1 月）に、成人看護方法論（急性期/周手術期）を開講している。授業の学修目標は、「生命の危機的状況にある成人患者の特徴を身体的、心理的、社会的側面から理解し、急性的変化を余儀なくする治療としての手術療法を中心とした治療の概要の学修をもとに、主要な手術を受ける患者の術前から術後の回復過程における円滑な回復を支援するために必要な看護実践の理論と方法を学修する」である。授業前半で周手術期における外科患者の病態の基礎において、手術侵襲と生体の反応や感染症を取り上げ、麻酔法や外科治療の実際、手術前中後の看護ケアを授業のテーマとした。授業後半では、外科領域における主要な疾患の看護について、事前学修として事例のアセスメント、

看護目標を記述する課題を設定し、看護の方向性の講義を交えて教員と学生間でディスカッションを行った。

3 年次前期（2014 年度 4 月～7 月）には成人看護方法論演習を開講している。授業の学修目標は、「成人期にある患者の急性期、慢性期、回復期における身体的、心理的、社会的特徴を理解し、治療を受ける患者および家族への看護実践を展開するための基礎的技術を習得する。また救急時の援助方法と救急蘇生法の基礎的技術を習得する」である。授業前半は、周手術期患者事例 2 例の看護過程展開をグループワーク形式で行い、最終のまとめとして各グループ毎に作成したポスターの発表を行った。ポスター発表では、再構成されたグループにて各自が担当したポスターを発表しながらポスターを閲覧した。看護過程展開に対するルーブリックを提示し、学生はルーブリックの各基準を学修指標として取り組んだ。看護過程に関するレポートはルーブリックにより成績評価を行った。授業後半では、事例展開した看護過程を基盤とした術前後における援助の演習を行った。

(2) 成人看護学（急性期/周手術期）におけるアクティブラーニングの授業形式導入

2 年次後期（2013 年度 9 月～1 月）成人看護方法論（急性期）、3 年次前期（2014 年度 4 月～7 月）成人看護方法論演習の受講生に対し、アクティブラーニング形式の授業を行った。

①事前学修の内容を各回ごとに記載したシラバスを授業初回に配布

②事前学修では active note（A4 サイズ指定）を作成し、ノートに毎回の事前学修を記入して授業に持参

③授業形式は、事前に発表者を指名し、事前学修した内容を学生が発表する。発表形式は、口頭もしくは資料を書画カメラで投影するか学生が自由に選択する。一人の発表ごとに教員と学生間でディスカッションを行う。教員は、あらかじめ授業でディスカッションする内容のストーリーを組み立てて授業に臨み、ディスカッションが円滑に進むよう進行をする。

４．調査の手続き

調査は自記式質問紙を用いた。初回の授業開始時にアクティブラーニングの授業形式導入説明を行った。授業の初回と終了時に、自分自身の学修理解度（学修能力の自己評価）、学修意欲・学修方法の自己評価を記入する自記式質問紙調査を行った。学修意欲・学修方法の自己評価質問項目は、学修への意欲的な取り組み、学修の積極性、授業方式の学修動機付け、学修方法の修得など 11 項目を尋ねた（表 1）。授業の終了時（成人看護方法論〔急性期/周手術期〕、成人看護方法論演習）には、学修理解度として授業を通してどれくらいの学修能力が身に付いたのかの自己評価（学修能力の自己評価）を尋ねた。なお、授業自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価については、複数名の教員間で検討して独自に作成した質問紙を用いた。

表 1　学修意欲・学修方法および授業の自己評価　質問項目

学修意欲・学修方法の自己評価	1	授業に意欲的に取り組むことができている
	2	授業で自分が何を学ぶべきか意識して取り組んでいる
	3	将来役に立つと思う内容については積極的に学習している
	4	この授業形式によって多くの知識を得ることができている
	5	この授業形式は興味深く学習を動機つけるものである
	6	自ら積極的に授業内容をまとめる作業を行っている
	7	わからないことは教員に尋ねたり、わかるまで調べられている
	8	わからないことは、友達同士で教え合い、時には議論する
	9	適切な資料・文献を探す方法を知っている
	10	授業に関連ある本や資料を積極的に調べている
	11	自分なりの学習方法が身についている
授業自己評価	1	これまでの授業を受けて学習目標はどの程度理解していますか?
	2	授業内容を理解していますか？
	3	これまでの授業で成人看護方法論演習の達成目標はどの程度達成できていますか？
	4	これまでの授業に参加してどの程度満足していますか?
	5	この授業のために行った事前学修の時間は何時間ですか？

毎回終了時の授業自己評価の質問項目は、本日の授業のねらいの理解度、授業内容の理解度、学修目標の達成度、自己の学びの満足度、事前学修時間の 5 項目を自記式質問紙にて質問した。事前学修時間について、「毎回どれくらいこの授業の事前学修を行っていますか（1 週間あたりの平均学修時間）」と尋ねた（表 1）。

授業の初回と終了時の学修能力の自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価、毎回終了時の授業自己評価の各質問項目に対し、全く理解/満足出来ない（1 点）～非常によく理解/満足出来た（6 点）の 6 段階リカートスケールを設定した。事前学修時間については、0 時間（1 点）、30 分程度（2 点）、1～2 時間（3 点）、2～3 時間（4 点）、3～4 時間（5 点）、4 時間以上（6 点）と設定した。

５．分　析

分析には統計ソフト IBM SPSS statistics Ver.21 を使用した。学修能力の自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価、各回終了時の授業自己評価の総得点の比較は、対応のある t 検定を用いた。授業自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価に対し、学修能力の自己評価による群間の比較は一元配置分散分析（ANOVA）を行った。

６．倫理的配慮

本研究は、城西国際大学看護学部倫理委員会の承認（第 25-3 号）を得て実施した。研究協力依頼書および同意書を対象者に配布し、研究の目的、方法、参加および回答は任意であること、回答内容や参加不参加は成績に全く影響がないことを文章および口頭で説明した。同意書への署名をもって、研究参加の同意を確認した。

Ⅲ．結　果

１．回収率

2 年次後期（2013 年度 9 月～1 月）に成人看護方法論（急性期/周手術期）の受講生 119 名（回収率 100.0%）、3 年次前期（2014 年度 4 月～7 月）に成人看護方法論演習の受講生 115 名（回収率 100.0%）の回答を得た。調査日の授業を欠席、欠損値のあった回答者を除いた 83 名を有効回答とした。

２．対象者の属性

対象者の性別は、男性 14 名（16.8%）、女性 69 名（83.1%）であった。

３．学修能力の自己評価

学修能力の自己評価について、2 年次後期終了時、3 年次前期の終了時の合計平均は 4.01 点（SD=0.95）であった。「非常によく出来た」と「出来た」の高群 17 名（20.4%）、「少し出来た」と「あまり出来ていない」の中群 57 名（68.6%）、「出来ていない」と「全く出来ていない」の低群 9 名（10.8%）であった。

４．授業初回時と終了時の授業自己評価

2 年次後期の授業自己評価 4 項目合計平均（事前学修時間以外）は、授業初回時が 3．14 点（SD=0.84）、授業終了時が 3．59 点（SD=0.78）であった（t（82）=-5.06，p<.001）。3 年次前期の授業自己評価 4 項目合計平均（事前学修時間以外）は、授業初回時が 3．03 点（SD=0.92）、授業終了時が 3．84 点（SD=0.71）であった（t（82）=-8.27，p<.001）。各授業とも初回時に比べて終了時の平均値が有意に高かった（表 2）。

５．授業初回時と終了時の学修意欲・学修方法の自己評価

2 年次後期の学修意欲・学修方法の合計平均は、授業初回時が 3．18 点（SD=0.87）、授業終了時が 3．53 点（SD=0.80）であった（t（82）=-5.09，p<.001）。3 年次前期の学修意欲・学修方法の合計平均は、授業初回時が 3．23 点（SD=0.91）、授業終了時が 3．68 点（SD=0.79）であった（t（82）=-5.89，p<.001）。各授業とも初回時に比べて終了時の平均値が有意に高かった（表 3）。

表 3　授業初回時と終了時の学修意欲・学修方法の自己評価合計平均

		授業初回時	授業終了時	t 値
2 年次後期 成人看護方法論 （急性期）	平均(SD)	3.18（0.87）	3.53（0.80）	−5.09***
3 年次前期 成人看護方法論演習 （急性期）	平均(SD)	3.23（0.91）	3.68（0.79）	- 5.89***

*** p＜.001　　n＝83

表 2　授業初回時と終了時の授業自己評価（事前学修時間以外）4 項目合計平均

		授業初回時	授業終了時	t 値
2 年次後期 成人看護方法論 （急性期）	平均(SD)	3.14（0.84）	3.59（0.78）	−5.06***
3 年次前期 成人看護方法論演習 （急性期）	平均(SD)	3.03（0.92）	3.84（0.71）	−8.27***

*** p＜.001　　n＝83

６．事前学修時間と学修意欲・学修方法との相関

事前学修時間について 2 年次後期の初回と終了時を比較すると、1.86 点（SD=1.27）から 3.46 点（SD=1.07）（t（82）=-11.78，p<.001）と有意に高くなっていた。3 年次前期では、4.14 点（SD=1.50）から 3.64 点（SD=1.13）（t（82）=3.05，p<.001）と有意に低くなっていた。事前学修時間、学修能力の自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価（各回授業の初回と終了時）間において、Pearson の相関係数を算出した。事前学修時間と学修能力の自己評価が増加するほど、学修意欲・学修方法の自己評価も増加しており、各項目間はどれも 0.40 以上の有意な正の相関を示した（表 4）。

表 4　事前学修時間と学修意欲・学修方法の自己評価との相関

			1	2	3	4	5	6
1	事前学修時間平均		1.000	.565***	.587***	.619***	.619***	.528***
2	学修能力の自己評価			1.000	.553***	.511***	.585***	.413***
3	学修意欲・方法	2 年初回			1.000	.731***	.988***	.662***
4		2 年最終				1.000	.745***	.770***
5		3 年初回					1.000	.677***
6		3 年最終						1.000

Pearson の相関係数(r)　***p<.001　　n＝83

7．学修能力自己評価と授業自己評価・学修意欲・学修方法の自己評価の比較

授業自己評価の各回授業の初回と終了時合計平均を、学修能力の自己評価の合計平均より高・中・低の 3 群に分けて比較した結果、学修能力の自己評価が高い学生は、学修能力の自己評価が低い学生に比べて授業自己評価平均値が 2 年初回以外は有意に高かった。学修意欲・学修方法の自己評価における各回授業の初回と終了時合計平均を、学修能力の自己評価の 3 群に分けて比較した結果、学修能力の自己評価が高い学生は、学修能力の自己評価が低い学生に比べて学修意欲・学修方法の自己評価平均値がすべての回において有意に高かった（図 1，図 2）。

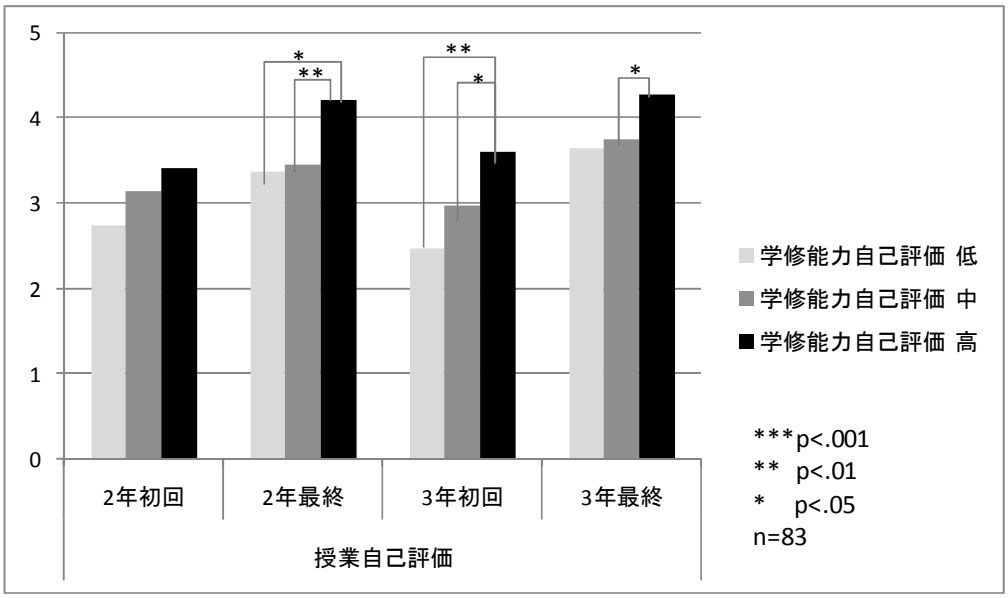

図 1　学修能力自己評価と授業自己評価平均

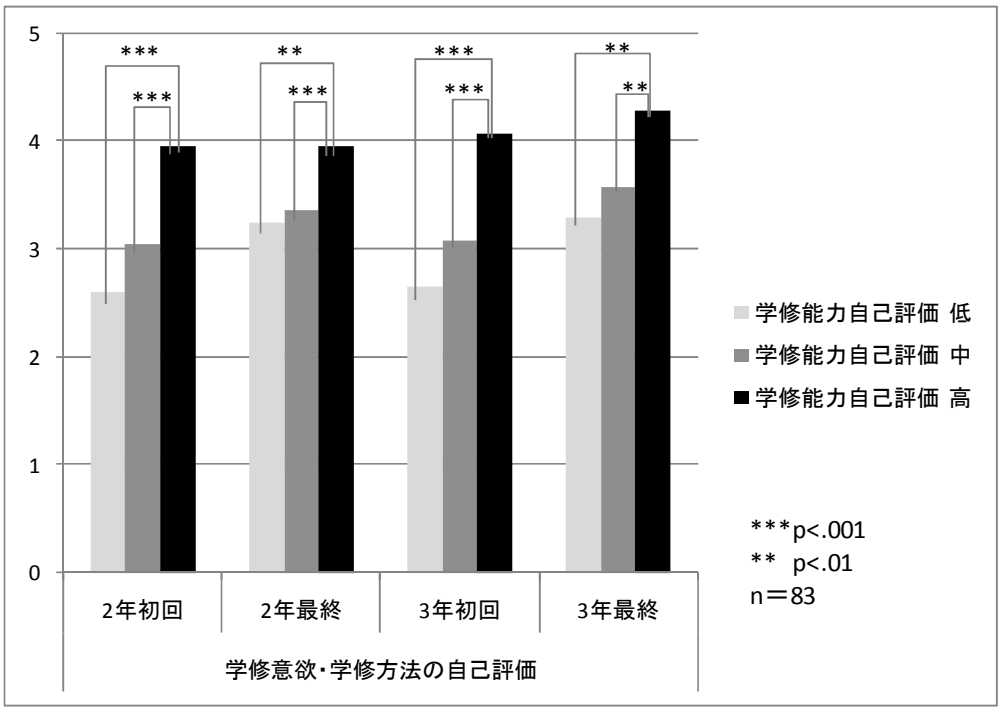

図 2　学修能力自己評価と学修意欲・学修方法自己評価平均

８．授業自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価尺度の信頼性係数

授業自己評価 5 項目の Cronbach の α 信頼性係数は、2 年授業初回時で.903、2 年授業開始中間時で.934、3 年授業初回時で.894 であった。学修意欲・学修方法の自己評価 11 項目の Cronbach の α 信頼性係数は、2 年授業初回時で.944、2 年授業中間時で.957、3 年授業初回時で.944 であった。

Ⅳ．考　察

１．授業初回時と終了時の授業自己評価および学修意欲・学修方法の自己評価

2 年次後期と 3 年次前期の授業の理解度や満足度、学修意欲・学修方法の自己評価は、初回に比べて終了時の方が有意に高いという結果が得られた。これらの理由として、各回の授業を通して学びが蓄積され、授業全体の学修目標に対する理解度も高まったと考えられた。また、15 回の授業を経て自分なりの学修方法が身につき、事前学修を行って授業に臨んだことで学修意欲が高まったと考えられる。

2 年次後期の成人看護方法論（急性期/周手術期）では、受講前に学修した解剖生理を基盤として周手術期看護の学修が進むにつれて、興味関心が湧き、学修意欲が高まった可能性も考えられる。外科看護は、患者の手術前・中・後、周手術期の全過程に対するすべての看護を含み、患者の精神面へのきめ細やかな配慮と、全過程を見通した一貫性のある継続的援助

が求められる（小路，2011）。周手術期の看護を学ぶには、解剖生理を基盤として膨大な知識を関連付けてアセスメントすることが必要となる。各回の授業での事前学修の active note に学修内容を要約して記載する作業は、範囲は広範に及ぶ。これまで学修する習慣がなかった学生からはどうまとめたらよいのかわからないという声が多数聞かれた。講義や事前学修でどのようにノートを作成するかは､大学で学ぶためのアカデミック･スキルズの一つである。看護の対象である患者の状態を捉える際には、要点をつかんで表現することが求められるため、学内の授業においても良いノート作成ができる習慣を身につけることが重要である。授業中にもノート作成のポイントをアナウンスし、授業中に発表者のノートを書画カメラで写すなど､クラス内で学修内容の共有を行った｡このことは学修方法が身につくきっかけになったと思われる。今回の授業自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価の分析結果から、学修方法の修得や低得点者の学修能力向上に向けて、授業の要点が理解できるための発問の工夫やタイミングなどさらなる授業改善の必要性が示唆された。

3年次前期の成人看護方法論演習における看護過程展開をグループで取り組んだことに対し、自分で気づけなかった情報や分析から深く事象を捉えることにつながり学修が深まったという声が多く聞かれた。3年次前期の成人看護方法論演習において、授業自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価が初回にくらべ終了時に高くなった理由として、友人同士で教え合い、議論したことにより学修への動機が高まり、必要に応じて文献や資料を積極的に調べるなどの学修効果によるものと考えられる。柴田ら（2011）は、グループワーク形式が、主体的な参加態度に影響を与え、発表という共有学修によって複数事例の学修が可能となり、効果的であったと述べている。看護過程展開において、グループワーク形式で活発に刺激し合いながら学修できるような環境づくりと、授業改善を効率化するためにADDIEモデル（ガニェ，2004）を用いて毎回の授業を検討していく重要性が再確認された。

２．事前学修時間と学修意欲・学修方法の自己評価との関連

事前学修時間の平均値を実際の時間に置きかえると約 2 時間前後となる。2 年次後期の初回と終了時に比べて有意に高くなっていた理由として､終了時は試験の直前でもあったため、試験勉強のために学修時間が増加していた可能性も考えられる。3 年次前期で有意に低くなっていた理由として、他の領域での看護過程の課題等も重なり、当該科目は演習が中心であったため課題量が少ない時には学修時間が減少したことも考えられた。さらなる学修への動機付け、学修意欲の向上に向けて、授業改善の工夫が必要である。

事前学修時間、学修能力の自己評価と、学修意欲・学修方法の自己評価の関係において正の相関を示したことは､わからないことを積極的に調べるなど学修をした分だけ､自分にあった学修方法が身に付いているとの学修効果を自己評価できていると推測できる。自ら問いを立てて模索出来る力を身につけるには、日々の学修において自分が何を学ぶのかを意識しながら取り組むことが重要である。経済産業省（2006）において「職場や地域社会で多様な人々

と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として社会人基礎力が定義された。これは「前に踏み出す力」アクション、「考え抜く力」シンキング、「チームで働く力」チームワークの3つの能力、12の能力要素から成る。これらの力の基礎として、自ら問いを立てられる力は重要である。また、「チームで働く力」は、地域貢献で多職種の人々との協働、患者の問題解決に必要な基礎的能力であり、今後、医療分野でリーダシップを取っていく上でも重要かつ必須な事象である。将来、社会に貢献するためには、基礎知識、専門学力に加えて、社会人基礎力を育成することが大学には求められている。毎回の授業においては、多職種連携やリーダーシップの獲得に向けて意識的な取り組みを評価し、社会人基礎力を育成できる授業づくりが効率的に行われることが重要である。

３．学修能力の自己評価、授業自己評価、学修意欲・学修方法の自己評価との関連

学修能力の自己評価の高・中・低群において、授業自己評価の 2 年次最終、3 年初回、3年最終での平均値に有意な差がみられた理由として、初回から前半にかけては授業のテーマやポイントの理解不足であったが、回数を重ねるうちに理解が深まり学修目標への到達につながったと思われる。学修能力の自己評価の高群においては、2年次初回授業自己評価は3.40点（SD=0.99）であったが、2年次最終には4.20点（SD=0.88）と伸び幅が大きかった。アクティブラーニング形式の授業展開では、授業内容の理解度や、学修意欲の向上に効果的な側面があり、学修への動機付けが上手くなされれば、さらなる向上が期待できる。学修能力に応じたきめ細やかな対応が必要であり、学生同士で教え合いお互いに高め合っていけるような環境や授業での刺激が必要である。

学修能力の自己評価の高・中・低群において、学修意欲・学修方法の自己評価平均値に有意な差がみられた理由として、学修能力が高いと自己評価しているものほど、学修の意欲が高く学修への動機付けされており、自分にあった学修方法が身に付いたと認識していると考えられた。学修能力の自己評価低群においても、授業の初回から終了時にかけて学修意欲・学修方法平均値が上昇しており、事前学修課題の克服、グループワーク形式での看護過程展開などの効果によると考えられた。

学修者が主体的に学修できる環境をどう整えていけばよいのか、学修能力に応じた対応など重要な課題が見出された。課題克服のためには、これまでの一方的な講義を受けるスタイルの受動的学びから、社会的基礎力としての主体的・能動的な学びへの変容が必要である。「能動的学修」、アクティブラーニングの定着に向けて、学生や社会が持つ価値観を転換し、主体的・能動的な学びに変容していくことが、大学教育、特に初学者への教育（学部教育）に求められている。また、学びのグローバル化が必要とされる今日、アクティブラーニングの評価による授業改善をつみ重ねた結果を、社会に発信していくことが重要である。

４．研究の限界と今後の課題

本研究は、1 学年に限られた縦断的調査の結果である。また、他の授業を受けた学修効果も含まれている可能性がある。今後の課題として、成人看護学（急性期/周手術期）におけるアクティブラーニングの学修効果がどのように現れるのか、臨地実習での効果などを継続的に検討していく必要がある。また、アクティブラーニングの具体的内容（発見学習、グループディスカッション、グループワーク）などの違いによる教育効果も検討していく必要がある。

Ⅴ．結　論

看護学部 2 年生対象に質問紙調査を行い、83 名を有効回答として分析を行った。①2 年次後期の成人看護方法論（急性期/周手術期）と 3 年次前期の成人看護方法論演習の授業自己評価平均は、各授業とも初回時に比べて終了時に高くなる。②学修意欲・学修方法平均は、各授業とも初回時に比べて高くなる。③事前学修時間と学修能力の自己評価が増加するほど、学修意欲・学修方法も各項目間とも 0.40 以上の有意な正の相関を示した。④学修能力の自己評価の高・中・低群において、授業自己評価の 2 年次最終、3 年初回、3 年最終での平均値は有意な差がみられた。⑤学修能力の自己評価の高・中・低群において、学修意欲・学修方法の平均値は有意な差がみられた。これらの結果から、成人看護学（急性期/周手術期）で取り組んだアクティブラーニング形式の授業展開により、学力向上、学修意欲向上の効果があったことが確認された。今後は学力や学修意欲を高めるための授業改善や、学修効果に影響のある要因などを含めて検討の必要がある。

文　献

経済産業省（2006）．社会人基礎力．www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf

道廣睦子，中桐佐智子，小林廣美，森崎由佳，明石智子（2014）．看護大学生のグループワーク達成感と批判的思考態度･社会的スキルとの関連. インターナショナル Nursing Care Research. 13(1). 1-11.

文部科学省（2012）．用語解説 www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/.../1212958_002.pdf

ロバート・ガニェ，ウォルター・ウェイジャー，キャサリン・ゴラス，ジョン・ケラー（鈴木克明，岩崎信監訳）（2004）．インストラクショナルデザインの原理．北大路書房.

柴田和恵，前田明子，大野和美，白石直美，大道梨乃（2011）．成人看護学看護過程演習の評価 ―自己評価による学修到達度と授業評価アンケートより―．天使大学紀要.11.29-37.

矢永勝彦，小路美喜子（2011）．系統看護学講座　別巻　臨床外科看護総論（pp.3）．医学書院.

Evaluation of active learning into adult nursing (acute phase) class

Yuriko Oku, Eiko Imai, Naomi Matsuo

Abstract

This study was conducted to demonstrate improvement in learning motivation and learning effect in adult nursing (acute/perioperative phase) classes that incorporated an active learning style. Second-year students in the nursing faculty were asked to complete a self-administered questionnaire, out of which valid responses from 83 students were analyzed. (1) Comparing the first and final classes in the latter term of the second grade and the former term of the third grade, average scores of class by self-evaluation and those of learning motivation/learning methods are higher in the final class for both terms. (2) As preparation time for the next class and self-evaluation of learning ability increase, both learning motivation and learning methods are scored higher. (3) Significant difference was noted in the average scores of class by self-evaluation and learning motivation/learning methods in the student groups with learning ability evaluated as high, moderate, and low on their own. The study results suggest that accumulation of knowledge through active learning classes enhanced the understanding of overall learning goals in students and this led to improvement in learning motivation and learning effects observed. Our study also suggests that further studies are required to improve classes for the sake of higher learning ability and motivation, as well as to examine factors influencing the learning effect.

Key words: active learning, adult nursing (acute phase) class, learning motivation